様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　5 月　20 日現在

機関番号：32635
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20500722
研究課題名（和文）母親の育児行動・体型への関心が幼児の健全な食行動の発達に与える影響について
研究課題名（英文）A study into the affects of mothers' nursing behavior and interests in preschool children's body shape in the development of healthy eating behavior

研究代表者　長谷川　智子（HASEGAWA　TOMOKO）
大正大学・人間学部・教授
研究者番号：40277786

研究成果の概要（和文）：本研究では，母親の育児行動・体型への関心が幼児の食行動に影響を与える要因について検討した．インターネットを介して 2 つの調査が実施された．1 次調査では，979 名の母親を対象としての体型への関心，食行動，育児行動と幼児の日常行動，食行動との関連が検討された．2 次調査では，68 名の母親を対象として食事の画像データが収集され，食事バランスが検討された．その結果，母親の体型，痩身願望や偏食が母親自身の食事バランス，授乳スタイル，子どもの食行動に影響を与えていることが明らかとなった．

研究成果の概要（英文）：This study investigated the effects of mothers' nursing behavior and their interests in their own and their preschool children's body shape on children's eating behavior. Two research projects were conducted mediated by the Internet. The first research project examined the interests of 979 mothers in their own and their children's body shape, eating behavior, nursing behavior and the children's daily behavior. The second research project examined the dietary balance of 68 mothers using photographic dietary assessment and the Japanese food guide spinning top. The results showed the effects of the mothers' body shape, their drive for a slim shape, 'henshoku', and nursing behavior on the mothers' dietary balance, the feeding style and the children's eating behavior.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	500,000	150,000	650,000
２００９年度	600,000	180,000	780,000
２０１０年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：生活科学・食生活学
キーワード：
育児行動・体型への関心・幼児・母親

１．研究開始当初の背景

日本では，幅広い年代での体重，体型の変化がみられている．このような体型の変化の背景には，特に女性を中心とした低年齢期からの痩身への意識の高まりがあげられ，小学生低学年から痩身願望がありダイエットをしていることも一つの要因として示されてきた．このような子どもの痩身・ダイエット志向が低年齢化している原因として，養育者である母親が深く関与している可能性が考えられた．そのような観点から，本研究では子どもの体型への過度な関心をもつ，または無関心な母親は，育児行動においても子どもへの過度な統制または放任があり，それらの

両方が直接・間接的に子どもの問題行動一般，さらには食行動上の様々な問題を生み出すものとする仮説を設定した．

２．研究の目的

本研究では，養育者である母親自身のダイエット志向，子どもの体型への関心の程度を取り上げ，さらに母親の育児行動が子どもの健全な食行動の発達にとって適度な「ゆらぎ」をもつものかどうか検討する．

本研究では，次の 4 点を目的としている．

(1)母親の育児行動，体型への関心が幼児の食行動に与える影響についての定量的・定性的検討

(2)母親の育児行動に対する意識と実際の食事に関する検討

(3)母親の育児行動，体型への関心，食意識・幼児の食行動，実際の食事のいずれかに問題がある場合の対応

(4)乳幼児の栄養指導，保健指導への適応の検討

３．研究の方法

インターネットにより 2 つの調査が実施された．

(1) 1 次調査

1 次調査は民間のインターネット会社に委託した．この会社に自発的モニターとして登録されている約 140 万名のうち，子どもをもつ核家族の 25～44 歳の女性のサンプルは 17,080 名であった．それらのサンプルからランダムに抽出された 3,000 名を対象にインターネット調査への参加依頼を E メールにて配信した．参加者は調査会社のサイト内に設置された画面上で，参加同意の確認がとられた上で調査に参加した．調査項目の冒頭において，核家族であること，子どもの人数が 1～3 名であり，3～5 歳児が最低 1 名いること，本人（母親）の年齢が 25～44 歳であること等 6 項目によるスクリーニングを通過した後に，すべての質問に回答した者が 1,000 名に達した時点で調査を終了した．調査期間は 2010 年 10 月 12～14 日であった．分析には，統計パッケージ SAS ver9.1 を使用した．

①調査対象者：1)子どもの人数が 1～3 名，2)3 歳児から 5 歳児をもつ，3)核家族世帯，4)年齢が 25 歳～44 歳という条件に該当し，すべての質問項目に回答した 1,000 名のうち回答に不備がない母親 979 名を分析対象とした．母親の平均年齢は 35.53 歳(*SD* 3.81)，調査対象となる子どもの平均月齢は 60.23 ヶ月(*SD* 10.43)であった．なお，3～5 歳児の子どもが複数いる場合は，年齢の高い子どもを調査対象とした．

②質問項目：母親の属性，子どもの食行動，日常行動，母親の子どもへの行動，育児感情，母親自身の食行動などに関する項目について大項目 29 項目，小項目 154 項目から構成された．評定は 4 件法または 5 件法により実施された．

(2)2 次調査

①対象者の抽出：1 次調査（長谷川・今田・田崎，2011）の協力者 1,000 名に対して，2 次調査の概要を示し協力者を募ったところ，希望者は 313 名となった．4 つの年齢群各 15 名を目標として，各群の職業の分布が 1 次調査と近似するように，協力者を年齢別職業別にランダムに抽出した．調査説明書，調査に用いる定規などが郵送された協力者は 108 名であり，5 名の所有した携帯電話が本調査に対応しておらず協力不能，35 名が辞退（途中棄権含む）した結果，調査完了者は 68 名(62.95%)となった．

②調査対象者：1)子どもの人数が 1～3 名，2)3～5 歳児をもつ，3)核家族世帯，4)年齢が 25 歳～44 歳の母親 68 名であった．年齢による内訳は，25～29 歳 13 名，30～34 歳 18 名，35～39 歳 19 名，40～44 歳 18 名であった．分析対象者の調査時点での平均年齢は 34.95 歳(*SD* 5.18)，平均身長は 157.79cm (*SD* 5.19)，平均体重は 51.34 Kg (*SD* 7.52)，Body Mass Index（BMI：体重*10000/ 身長 ^{2}）の平均値は 20.60 (*SD* 2.76)であった．

③手続き：レンタルされたサーバー上の SNS エンジン：OpenPNE(株式会社手嶋屋)において実施した．OpenPNE では，参加者各々の「日記」が用意されており，写真付きで日常生活が記録でき，管理者も参加者の一人として WEB 上での交信が可能である．調査協力者には ID 番号を送信し，以後の交信はすべて ID 番号により交信した．食事調査は，1 週間のうち非連続の 3 日間（内，1 日は休日）に飲食したものすべてを対象とした．食事の記録の方法は次の 2 つであった．第 1 は，対象者が携帯電話の写真機能を用いて撮影し，メール機能を用いて OpnePNE に送信し，「日記」として掲載された．写真撮影は，各食事につき真上からと斜め 45 度からの 2 枚であり，撮影の際には食事量を正確に測定するために 15cm の定規を置くこととした．第 2 は食事状況に関する記録であり，食事のメニュー，料理の作り手，摂取時刻，摂取場所，共食者の有無，自由記述を食事ごとに OpenPNE 上に送信し，「日記」として掲載した．協力者の食事の写真や食事の記録に不備や不明点がある場合は，「日記」のコメント欄を通して協力者に尋ねることにより，情報を補完した．調査期間は 2010 年 10 月 28 日～12 月 3 日であった．

４．研究成果

研究の成果の概要は以下の 5 点である．5

つの概要を通していえることは，母親自身の痩せ願望の強さとそのことの子育てへの影響である．特に(1)で示したように，本研究では，母親の授乳スタイルのあり方が，1)母親の体型や痩身意識の要因と 2)母子関係の要因の両方が関係することが明らかにすることができた．従来の医療・保健現場における授乳指導は，子どもの授乳量や母乳の分泌および授乳時の体位などの実践的な側面に焦点化されることが多い．本研究の結果から授乳指導において母親の授乳スタイルに注目し，母親による子どもの要求の読み取りに重点を置くことが長期的な母子の支援になる可能性があることが示唆されており，早期の母子関係介入のひとつのアプローチとして，今後の医療・保健現場において有益な知見が得られたといえる．

(1)1 次調査において，現在の育児充実感を従属変数とした要求授乳に関する SEM のモデルを検討した（図）．まず，要求授乳に影響を与えた変数は，子どもの人数の多さの他に母親の体型，母親自身および子どもへの痩身意識の強さであった．すなわち，子どもの痩身への期待が低いと要求授乳となり，子どもの痩身への期待の低さの背景として母親自身の痩身願望の低さ，BMI の低さが認められた．一方，BMI は子どもの痩身への期待にも直接的に影響を与えており，母親の BMI が高いほど子どもの痩身への期待が低いというパスが認められた．要求授乳が直接的に影響を与えた変数は育児充実感の強さと子どものやることを口出しせずにやらせているとする母親の行動であり，そのような母親の行動が子どもの笑顔の多さと育児充実感の強さに影響を与えていた．

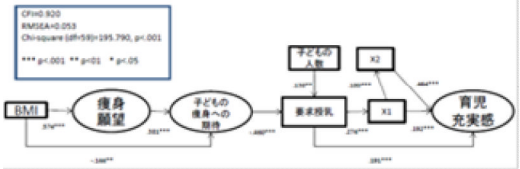

図　要求授乳に関する SEM の結果

(2)1 次調査において，母親の育児感情，子どもの食行動等への母親の期待，子どもの食行動に関する項目それぞれについて主因子法により因子分析（直交解ヴァリマックス回転の後に斜交解プロマックス回転）をおこなった．その結果，母親の育児感情については，「ネガティブな育児感情」と「ポジティブな育児感情」の 2 因子，子どもの食行動等への母親の期待については，「子どもの痩身への期待」，「子どもの食行動の積極性への期待」の 2 因子，子どもの食行動については，「食物選択の偏り」，「注意集中の低さ」，「自由な間食摂取」の 3 因子を最適解とした．子どもの食行動の問題を示す 3 因子を目的変数とし，子どもの行動に関する 8 項目，母親の行動に関する 8 項目，育児感情に関する 2 因子，子どもの食事等への期待に関する 2 因子を説明変数として，重回帰分析（ステップワイズ法）を行った．子どもの食行動に関する 3 つの問題すべてに影響を与えた変数は，子どもの落ち着きのなさ，母親がしつけを重視しないこと，子どもが泣いたらお菓子を与えるということであった．一方，自由な間食摂取に関する問題には，食物選択の偏りと注意集中の低さと異なり，母親は子どもが痩せていることを期待していることが示されるなど，自由な間食摂取は他の 2 つの問題と異なった変数が影響していることが示唆された．

(3)母親の痩せ願望，身体自尊感情の下位尺度である痩身期待，不幸感，不満感，自信，食行動の下位尺度である抑制的摂食傾向，情動的摂食傾向，外発的摂食傾向，BMI，理想とする BMI について，母親の年代（25-29 歳，30-34 歳，35-39 歳，40-44 歳）×子どもの性(男児，女児)の分散分析を行った．その結果，外発的摂食傾向に年代の主効果がみられ，30-34 歳の母親の方が 35-39 歳の母親よりも有意に高かった．また，理想とする BMI について年代および子どもの性の主効果がみられ，25-29 歳および 30-34 歳の母親の方が 40-44 歳の母親よりも理想とする BMI が有意に低く，また男児の母親よりも女児の母親の方が有意に低いことが示された．なお，痩せ願望については，年代の主効果がみられたが，各水準間に 5%水準で有意な差は認められなかった．痩せ願望，身体自尊感情に関しては年代や子どもの性別による違いは認められなかったものの，理想とする BMI は，若い世代の母親の方が低く，また，女児の母親の方が低いものであった．また，母親の痩せ願望や身体自尊感情と食行動傾向の間には有意な相関関係がみられた．母娘の関係が，娘の痩せ願望や摂食障害と関連していることを踏まえると，本研究の結果は，青年期女性に多くみられる過度なダイエット志向や，摂食障害発症といった問題に関して，より長期的な視点での親子関係を考慮する必要性があるといえる．

(4) 2 次調査において，調査対象者の 3 日間の食事を食事バランスガイドによって，主食，副菜，主菜，牛乳・乳製品，果物，ひもに分類し，1 日あたりのそれぞれのサービング数(SV)を算出した．その結果，健康維持の目安となる SV に達しなかった分類は，主食，副菜，牛乳・乳製品・果物であり，幼児をもつ母親の食事バランスは健康を維持するに十分でないことが示された．また，調査対象者

を 25～34 歳，35～44 歳の 2 群に分け，食事バランスの平均値を比較したところ，25～34 歳の方が牛乳・乳製品の摂取が少ないことが示された．また，食事の分析結果を希望者に対して，フィードバックを実施し，解決策を提案した．

(5)1 次調査と 2 調査のデータに基づいて，母親の日常の食事バランスにおける主食，副菜，主菜，牛乳・乳製品，果物，ひもの 6 分類と母親の体型・食態度との関連性について検討した．その結果，主食摂取が多いほど，理想 BMI が高く，出産前と現在の体重差が少なく，摂食が抑制的でなかった．また，副菜摂取が多いほど偏食が少なく，母親および配偶者の学歴が高いことが示された．また，主菜の摂取が多いほど，外食が多く，配偶者の学歴及び年収が低い傾向がみられた．さらに，牛乳・乳製品の摂取が多いほど偏食が多く，母親及び配偶者の学歴，年収が高いことが示された．果物摂取が多いほど出産前と現在の体重差が大きい傾向にあり，外食が少ない傾向がみられた．最後に嗜好品のひもの摂取と関連する変数はみられなかった．以上のことから母親の日常の食事バランスは主食に関しては体型の要因が関与し，副菜，牛乳・乳製品に関しては偏食の要因が関与することが明らかとなった．

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

［雑誌論文］（計 5 件）

① 今田純雄，長谷川智子，田崎慎治，高垣敦郎，家族の食卓と子育て（１）：飽食環境と母親. 広島修大論集（人文編），53，査読無，印刷中
② 今田純雄，長谷川智子，武見ゆかり，田崎慎治：Survey Monkey を用いた「食事バランスガイド」教育プログラム作成の試み. 広島修大論集（人文編），52, 63-76, 2012，査読無
③ 長谷川智子，今田純雄，川端一光，坂井信之，食行動の発達心理学的展望(3)大学生の食態度・食行動についての基礎的研究－食の優先順位，経済的要因の観点から-，大正大学大学院研究論集，34,1-21,2010，査読無
④ 長谷川智子，食行動の発達心理学的展望(2)Birch らの親子の食行動に関する縦断的研究大正大学大学院研究論集，33, 1-22,2009，査読無
⑤ 長谷川智子，食行動の発達心理学的展望(1)Birch らの乳幼児期の食物嗜好と食物摂取調節に関する研究，大正大学大学院研究論集，32, 1-21,2008，査読無

［学会発表］（計 7 件）

① 長谷川智子，今田純雄，田崎慎治，幼児と母親の食行動に関する研究（１）幼児の食行動の問題に影響を与える母子の要因の検討．第 75 回日本心理学会，2011 年 9 月 16 日，日本大学
② 長谷川智子，今田純雄，山中祥子，田崎慎治，幼児と母親の食行動に関する研究（２）母親の日常的な食事についての基礎的分析．第 24 回日本健康心理学会，2011 年 9 月 12 日，早稲田大学
③ 長谷川智子，今田純雄，武見ゆかり，田崎慎治，日常の食行動に関する健康心理学的・食生態学的検討(3)大学生と中学生の日常的な食物摂取と共食について，第 23 回日本健康心理学会，2010 年 9 月 12 日，江戸川大学
④ 長谷川智子，川端一光，今田純雄，母親の育児ストレスに影響を与える食行動の要因についての因果的検討, 第 21 回日本発達心理学会，2010 年 3 月 26 日，神戸国際会議場
⑤ 今田純雄，長谷川智子，武見ゆかり，田崎慎治，日常の食行動に関する健康心理学的・食生態学的検討(2)携帯電話の通信機能を活用した食行動測定の試み，第 22 回日本健康心理学会，2009 年 9 月 8 日，早稲田大学
⑥ 長谷川智子，今田純雄，川端一光，田崎慎治，授乳スタイルに影響を与える要因についての探索的研究, 第 73 回日本心理学会，2009 年 8 月 27 日，立命館大学
⑦ Sumio Imada, Tomoko Hasegawa, Hisashi Masuda, Atsuo Takagaki, Takashi Sakamoto, Hiroki Koyama, Charles Prible, Attitudes to food and the role of food in life in Japanese women, XXIX International Congress of Psychology, 2008 年 7 月 21 日,Berlin

［図書］（計 6 件）

① 長谷川智子，東京大学出版会，子どもと食：食育を超えて，印刷中
② 今田純雄，東京大学出版会，子どもと食：食育を超えて，印刷中
③ 長谷川智子，発達心理学事典，印刷中
④ 長谷川智子他編著，子どもの食と栄養，診断と治療社，2012，総 235 頁
⑤ 長谷川智子，有斐閣，健康心理学・入門，2009，　89-105
⑥ 長谷川智子，医歯薬出版，心・栄養・食べ方を育む乳幼児の食行動と食支援，2008，24-31

６．研究組織

(1)研究代表者

長谷川　智子（HASEGAWA TOMOKO）

大正大学・人間学部・教授

研究者番号：40277786

(2)研究分担者

今田　純雄（IMADA SUMIO）

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：90193672

田崎　慎治(TAZAKI SHINJI)

広島大学大学院・教育学研究科・特任助教

研究者番号：20533988

川端　一光（KAWAHASHI IKKO）

（H21→H22：連携研究者）

早稲田大学・文学学術院・助手

研究者番号：20506159

(3)連携研究者

川端　一光（KAWAHASHI IKKO）

独立行政法人国際交流基金・日本語試験センター・研究員

研究者番号：20506159